

第八〇回 東洋文化講座（二〇一二年二月二日）

「東洋文化研究所と私」

濱田耕策

只今、過分なご紹介をいただきました、濱田と申します。東洋文化研究所に貢献したというご紹介でしたが、それは真に過分な紹介でありまして、助手という立場で五年間の勤務でしたから、どれほどの仕事ができただか、心許ない次第です。ただ、東文研を離れても、東文研の活動を遠くから拝見していた、また、東文研の成果を利用していたという立場から「東洋文化研究所と私」というお話はできるかと思います。

東文研の基礎を築いたというご紹介がありました、東文研の所属が学習院から学習院大学へと組織変えになるときに、末松保和先生が長らく東文研の主事を勤められて昭和五〇年三月に定年退職された後に、小倉芳彦先生が主事をなされ、東文研が大学の付置機関となりますが、その当時の助手で、現在は流通経済大学に勤務されておられる原

宗子さんや、長らく東文研に勤められて、今は岩手県立大学におられる中尾美知子さん、また、私と一緒に助手を勤め、今は東京国際大学に勤務されている田村愛理さん達は女性の助手でありまして、副手さんも女性と言うことで、女性に助けられたと言いますか、鍛えられたと言いますか、私は大学の付置となった東文研では男性助手のはじめであり、そういうことで何とか頑張ってきたということです。（笑）

最近、東文研には女性の助教が誕生されていないようですね。内部のことに係わってはいけません、二人の助教がいましたら、女性の一人もいいものではないかなと、女性研究者の養成のことをこの頃は思っています（笑）。それは内部のことですから、何とも申しません。

さて、先程、ご紹介いただきましたが、私は史学科の助

手を昭和五五年三月から三年間勤めた後に、東文研の助手を昭和六三年まで五年間勤めましたので、助手として学習院の東洋学研究所をお手伝いし、先立つ大学院生時代は諸先生の講義を受講しながら、学習院の東洋学を学んできたという立場です。

〔東文研の時期区分〕

今日は三〇分間の持ち時間ですから、東文研の六〇周年のお祝い、また、東洋文化講座の八〇回のお祝いということで、東文研の時期区分を私なりにしてみました。私も六三歳という年齢を迎えて還暦を過ぎますと、何事も振り返りがちですが、振り返るにつけては、やはり時期区分をしていくということが身についてまいりました。私も大学で授業をしながら二〇歳前後の学生にみずからを振り返ってみるということは早いでしょうけれども、それなりに今までの自分を時期区分し、将来の時期区分を予測してみなさいという話をいたします。

私が見たところ、東文研の六〇年は三期に分けてみることで可能でしょう。第一期は戦後の新学習院、その背景にある敗戦後の新生日本をつくるという時代の希望を受けて、安倍能成院長が西洋の文化と並んで東洋の文化を研究し、社会の知識となすことがいかに大事かということを訴えられて、東文研を設立された昭和二十七年から研究所に研究プロジェクト体制が始まる五〇年まででしょうか。この第一

期はご承知のように『李朝実録』の刊行、あるいは、『学東叢書』など、朝鮮の歴史書と法典類の古典籍を影印刊行するという事業で代表されます。この事業が財政的にも大変苦労の中で、末松先生の主事のもとで進められたという時代でしょう。

私は末松先生の在職最後の一年に続いて先生のご退職後は昭和六四年初めに私が九州大学に勤務するまで、教室とご自宅で教えを受けた者でありまして、大変怖いといいますが、先生と接する時はいつも緊張したものです。ただ、折りに付けて書物を手づから頂いた思い出があります。中尾さんは副手として長年、末松先生のもとで、当時、主事室は図書館四階の奥の部屋でしたが、よく勤められたものと、私は感心するほどです。ほんのりとした優しさでしょうね。(笑)。先生のご退職後に東伏見のお宅を訪問することになりましたが、その初めは中尾さんのお誘いでした。

末松先生についての紹介は、今日も史料館展示室で学習院の東洋学の資料やパネルが展示されておりましたが、京城帝国大学の朝鮮史学講座の先生であり、当時は法文学部長の安倍先生に大変かわいがられ、先生も私淑されておられたようで、また、講座主任の藤田亮策という朝鮮考古学の先生にも非常に親しくされていたというお話でした。

今日は、ここに末松先生が登場する一冊の書物を持って参りました。この『信念と人間』という、二〇〇一年に平壤から出版された金錫亨（キム・ソクヒョン）氏の伝記小

説です。ご存じの方も多いでしょうが、金錫亨氏は京城帝大の朝鮮史学科を昭和一五年に卒業された朝鮮の代表的な歴史学者であり、末松先生の教え子です。大変優秀な成績で京城帝大に入学し、志願者の少ない朝鮮史学を専攻したという方ではありますが、卒業と同時に助手になります。当時、朝鮮人で朝鮮史を専攻するというその気概のほどがこの伝記にも綴られています。金錫亨氏は解放を迎えて平壤に移り、金日成統治下では社会科学学院の院長を一九九六年一月に亡くなるまで勤められました。末松先生はその著書である『朝鮮封建時代農民の階級構成』を共訳され、東文研の叢刊として昭和三五年に刊行されています。

一九七二年に高松塚古墳の壁画を主題として国際シンポジウムが開かれましたが、この壁画の様式は高句麗系、あるいは中国の唐の様式か、はたまた大和系かという議論が盛んでしたが、韓国からは李基白（イ・キベク）先生、日本からは井上光貞先生、そして、平壤からは金錫亨先生がお見えになって、それぞれの見解が語られました。

この『信念と人間』の中に、末松先生が二章にわたって、金錫亨氏と対面、会話する場面が描かれています。

末松先生は金錫亨氏の指導教授であったということ、それから、末松先生といえば韓国、北朝鮮では、古代では日本が朝鮮半島南部の任那に日本府を置いて半島を統治したという説を展開した書物として、先生の著書の『任那興亡史』が理解されて非難されることがありますが、末松先生

が京城帝大での最後のころの講義が古代の日朝関係史でしたから、戦後にその講義をまとめた書が『任那興亡史』ということです。この書が韓国、あるいは、北朝鮮では、古代の日本による朝鮮三国支配説の論拠づけだと理解されていますが、末松先生はそれは誤解であると御不満でした。さて、『信念と人間』では、新入生の金錫亨氏が末松先生の研究室に挨拶のために訪問するところから始まります。二人の対話のなかで、先生が大邱に史料調査に出かけた際に訪問した弁護士宅の聡明な少年が金錫亨氏であったことが綴られています。

また、シンポジウムのために来日したなかでは、金錫亨氏と言えば、三韓三国が日本列島内に分国を置き、この分国と大和政権との関係の歴史が『日本書紀』に記された三韓三国と大和政権との関係史であり、従って任那日本府による半島南部の支配は存在せず、任那日本府論は否定されるという、独特の学説を提唱した朝鮮の歴史学者として知られています。これは任那日本府論を逆転する古代日朝関係史論です。

この「三韓三国日本列島内分国」論によって金錫亨氏は日本、韓国の古代史学界ではよく知られています。金錫亨氏がシンポジウムのために来日することとなったニュースに接した末松先生の心の動静と、先生に私淑されていた村山正雄さんだと思われる歴史学者が、金錫亨氏の前で任那日本府論の敗北を認めるという内容がこの伝記に綴られ

ています。

村山さんは金錫亨氏の説について、史料を基本に最初に批判された方ですが、この時、金学説について、史料批判として、また歴史認識の思想の問題として把握するか、という二つの対応がありました。

こういう平壤での金錫亨氏を讀める伝記のなかで、末松先生と村山さんの姿と言葉が描かれています。

さて、東文研の第二期は、昭和五〇年四月から小倉先生の主事時代ですが、東文研が学習院の付置機関という、それまで院長が所長を兼ね、末松先生が長らく主事という第一期から、およそ一年の審議を経て、東文研が大学の付置機関となり、共同研究を推進する学内に開かれた研究所となったことが時期を区分するでしょう。この頃は中尾さんと原さんが助手として、個性的な所長のもとで二人が貢献されたかと思います。加藤秀俊先生、あるいは、飯坂良明先生の所長時代です。

ここからプロジェクト体制が発展して、『調査研究報告』が発行されるようになります。また、昭和五八年には「友邦文庫」を受け入れて、その目録づくりが囑託の方々を中心として、東文研の一室で行われておりました。

これも中尾さんに声を掛けられて、大手町の日本ビルにありました友邦協会と一緒にでかけて文庫を見学して参りました。学習院の水田直昌理事や福岡顕経理部長に文庫の現状を報告したことを思い出します。

さらに、膨大な『朝鮮戸籍大帳』は特筆すべき資料です。これは白鳥庫吉が明治の末に朝鮮を訪問した折に購入されたものと推測される、あるいは、展示室の案内表記によりますと、古書肆を通して学習院に納入されたようでありますが、これは大学図書館の所蔵する資料のようですが、慶尚南道丹城郡はか一一の郡県に關する一九世紀の戸籍大帳の百二一冊です。郡県の戸籍大帳がこれだけあるということは、朝鮮は新羅時代以来、全国に二八〇ほどの郡県の数ですから、各地に朝鮮時代の戸籍があったはずです。その戸籍が今日、韓国に多くは伝わらず、学習院にこれだけまとまってあることは貴重です。

末松先生が語られたことがあります、当時のこと、紙は貴重ですから、紙を漉き直して、再生紙として利用することが盛んであったということです。三年ごとに作成される戸籍大帳はそういう事情からもなくなっているのではないかという見方も可能かと思えます。

朝鮮の各県にあったはずの戸籍大帳が韓国にまず多くは残存してなくて、ここ学習院に保存されていることは希有な来歴であり、また貴重な学術的価値はこれからも一層明らかにされるでしょう。

この第二期のなかで、本日ここにお見えの、当時東京大学の先生でありました武田幸男先生を中心とするグループがこの大帳を整理研究され、その成果を『調査研究報告』に五冊にわたって著しています。これは学術成果として非

常に優れた成果です。

次に、平成一年から今日までの第三期では、本日、私のお話される前所長の岡孝先生にも関わることでしようが、研究等の活動が大変に活発になった。いろいろな事業が、特に学際研究と国際共同研究という面で活発になっておりますし、その成果は『東洋文化研究』あるいは、『研究叢書』が新しく刊行されて、そこに発表されております。

また、全国の若手の研究者、東洋学を研究する大学院生などに研究費を助成して研究を支援するという、他大学の若手研究者を助成するなど、なかなか出来る事業ではないですね。これは学習院らしい、おおらかなゆとりでしょうか。国立大学法人では、事務的にもできないことです（笑）。

〔学術的資産〕

ここで、東文研の今日までの学術的資産として何をあげることができるかと問えば、私は朝鮮研究の立場から、次ぎの四点をあげることができるでしょう。

まず、周知のように、『李朝実録』五六冊。今日では『朝鮮王朝実録』と呼ぶことが正当でしょうが、この膨大な実録を影印刊行するに当たっては、中国科学院の郭沫若院長の援助によって、中国科学院が毎冊百部を予約購入されるという、その費用を前金で送金されたという日中友好の大きなお話もあります。京城帝大の法文学部が昭和四年

から七年にかけて膨大な実録を三〇セット影印刊行されていますが、これは国内には帝大の法文学部などに一〇セットほど架蔵されているばかりです。学習院が設立間もない東文研の初期事業として京城帝大版の実録を影印刊行され、内外に普及されたわけですね。

この事業は昭和二八年（一九五三）年六月に第一冊が刊行され、昭和四二年（一九六七）一〇月の第五六冊まで、なんと一四年の間継続されています。学習院が『李朝実録』を刊行し始めますと、これが韓国政府を刺激したようです。二年後に韓国の国史編纂委員会から大判の『朝鮮王朝実録』が影印刊行されはじめます。当時の韓国の文教部の長官は李宣根という方でした。この方は国史編纂委員会委員長を兼ねていましたが、日本から国宝の『李朝実録』が刊行され、それが世界に紹介されていることは、「民族的な大きな羞恥」であるということから、国史編纂委員会により影印刊行されることになりました。李宣根長官が第一巻の刊行の辞にそのことを書かれております。

李宣根長官は戦前に早稲田に学んだ方で、朴正熙大統領時代に活躍された歴史家ですが、私が大学院の頃、韓国の大邱にあります啓明大学校に留学した折、「歴史の香氣」というラジオ番組で、韓国の若者に韓国史を素材にして「民族の生氣」を語っていました。

『李朝実録』につづく学術的資産は『学東叢書』があげられます。朝鮮の史書と法典類の一三種一六冊がやはり影

印刊行されています。これも朝鮮学を勉強する者にとって、実録と並んで大変貴重な史料群です。『学東叢書』は箱入りで、紙質も印刷、装丁もよく、大変品格がある、さすがに学習院の刊行書だと思えます。『学東叢書』は私にとっておおいに役立っております。

私は朝鮮古代史を専攻していますから、『三国史記』や『三国遺事』をよく研究と教育に活用していますが、最近では『東文選』と『続東文選』を活用しています。この書は日本ではまだ十分に活用されていないようですが、朝鮮の漢文学、特に、高麗末から朝鮮王朝前期の文人の詩文が収まっております。私も年をとりますと、専門の分野から少し離れて、ある意味成長して、隣接の分野や史料に取り組むようになりました。

近年では、新羅末期の崔致遠という文人官僚に注目しています。唐末の楊子江下流域で軍政を担当していた節度使のもとで文筆を担当し、新羅に帰国したこの人物の歴史観に関心がありますので、その作品を大学院生の演習で、中国哲学と朝鮮史学の大学院生、それから、中国からの留学生を交えて四人で読んでおります。朝鮮の漢文作品を読み込んでいますと、文脈のなかに故事が踏まえられており、小倉先生の『春秋左氏伝』の研究を勉強していないといけないと実感しております。新羅以来、朝鮮の文人が『左伝』をはじめ四書五経を深く読んで、自らの知識としていたかということが解ります。なかなか難しい漢文ですが、

中哲の学生に聞くと、「これは左伝、易経のどこそこにあります」と教えられる。朝鮮史料を中国学の専攻者を交えて取り組むとなかなか理解の幅が広がります。

学術的資産の三番目としては、先ほど申しました『朝鮮戸籍大帳』があげられます。これは学習院図書館がこれまでしっかりと保存してきたということ、また東文研が武田先生をはじめとするグループの研究を支援してきたということは評価されるものと思います。

この大帳は今、立教大学に勤務している深津行徳助手の時代に韓国の精神文化研究院、今日の韓国学中央研究院にマイクロフィルム化して伝わっているようです。

四番目は、「友邦文庫」です。やはりこの史料群も確かな目録を作成し、刊行して公開しているということ。さらに、宮田節子先生を中心として、梶村秀樹先生、姜徳相先生を中心に六〇年代に大学院生だったでしょうか、友邦協会に集っていた朝鮮総督府の元官僚を中心に、朝鮮統治の体験談を聞き取られた、そのテープが文庫に眠ったままであったのを文字化し『東洋文化研究』に公表していること。これも大変有意義なことです。

こういう事業に資金をちゃんと出すというのはやはりこれまでの東文研の実績を大学が評価しているからでしょう。私が見たところ、朝鮮の実録を初めとする古典籍の影印刊行、そして、『朝鮮戸籍大帳』の保存と整理と研究、「友邦文庫」の整理研究と公開等が東文研の朝鮮学の資料を活

用した大きな成果だと思えます。

〔助手時代の思い出〕

次に、私の助手時代のお話に進みます。私は昭和五八年四月から六三年三月までの五カ年の間、東文研の助手を勤めました。当時の所長は林友春先生と斎藤孝先生でした。田村愛理助手とふたりで、プロジェクトの進行の補助をしたり、運営委員会などの準備をいたしました。林先生は満鉄総裁の御息であられたということで、先生のお姿を拝見しつづこかで近代史を考えていましたが、先生は助手の提案をよく聞かれて、“良きに計らえ”のように負担なく勤めることができました。

斎藤先生は歴史観のあり方を中心として社会的にもいろいろ活躍されておられましたが、会議が終わった後、私を連れ出して新宿のコリアンバーに案内していただいたり、作家の小田実に紹介していただき、私にのし掛かるような巨体から「朝鮮は大事なんだよ」と励まされたり、いくつかのアフターファイブがありました。今振り返れば、有意義な五年間の助手時代でした。

私が東文研でなしたことは如何ほどのことはないんです。思い出としては、私が史学科の助手を勤めていたところから始まるのですが、NHKではハングル講座を開設するかしらないかの頃、各地の大学では朝鮮語教育がまだ活発でない、ほとんど始まっていない頃のことです。学習院では講習会

ということと、東文研の一室で朝鮮語講座を夕刻五時から七時まで開きました。昭和五十六年度と五十七年度の受講生リストを今も保存していますが、二〇数名の学生や図書館や本部の職員さん、そのなかには今、同志社大学で活躍の佐伯順子さん、それに北九州市立大の中野博文君の名前が記入されています。

私が大邸から戻ってきたばかりということで、私が文法的な話をしながら、ネイティブスピーカーとして韓国から東京にやって来た三名の方に順次に手伝って頂きました。お二人はその後NHKがハングル講座を開始しますと、そちらで大活躍することになりました。今日も国際部やハングル講座で活躍されています。私は時々NHKのラジオ第二放送を聞いていますが、お二人の綺麗なソウル言葉は衰えてはおらず、聞き惚れています。

また一人は、私が大邸で日本史や日本語会話を教えたときの男子学生でした。ある大学の修士課程で日本語を専攻していましたが、博士課程に進学できず、将来を悲観して寄宿舎に閉じこもりがちの時に誘われたのでしよう、シンガポール経由で北に亡命してしまいました。今、地方の大学で日本語教育を担当しているとの噂ですが、元氣でいるのか心配しています。

次ぎの思い出は、私は史学科の助手に採用されまして、月々の給料から『李朝実録』を二、三冊ずつ購入し、二六ヶ月をかけて全冊を揃えました。そのときの領収書はこの

ように今に至るまで保存しております（笑）。これは中尾さんの筆跡ですね。私は古代史を専攻していますから、『実録』を使って研究することは少ないのですが、学生の卒業論文や修士、博士論文の審査では、実録の史料を正確に引用しているかを判定する際には活用しています。学生院生に私のほうが勉強させられております。学習院の実録はコンパクトで持ち易いことは宜しいのですが、やはり目を疲れさせます。この点は国史編纂委員会の実録は大判で優っていますが、今や稀覯本となり購入費とその保管に苦劳いたします。

今日、『朝鮮王朝実録』は、国史編纂委員会がネット上にオープンにしていますから、学生はこれを検索して活用しています。項目を入力すればたちどころに探したい史料が出てくるという、真に利便性は優れています。しかし、そこに辿り着くまでに道草や落ち穂拾いができない、“遊び”がない。また、国史編纂委員会のH P版には韓国語訳が付いていますが、同音異義の熟語や歴史用語がハンゲル表記では判別できない。漢字をハンゲルで音訳していますから、それを漢字に戻すには、原文を見なければ変な同音異義の漢字に訳してしまうという落とし穴があります。

実録のことでは、斎藤先生が所長のときでした。『李朝実録』五六冊の前半部、太祖実録や太宗実録と世宗実録、それに壬辰倭乱を扱った宣祖実録等は日本ではよく使われるので、在庫部数にばらつきが生じていました。そこで、

残部少々の実録を増刷することになりました。私は増刷して販売できるだろうかと心配したのですが、一七冊にわたって、第二刷をつくりました。仮刷りを目を通して印刷の掠れなどを修正し、補正表をつくりました。末松先生の仕事のほん少しを体験することができました。

それから、『高麗史節要』。これもよく販売されており、第二刷を出しました。それから『三国史記』の鑄字本、金属活字本のことでありますが、この版本を末松先生が神田の山本書店から購入され、これを『学東叢書』として影印刊行されたいということで、『学東叢書』の一三巻として、昭和六一年五月に刊行いたしました。この書は「康熙（一七一一）年」一〇月「に司憲府の長官であった權尚夏に下賜されたこと示す「内賜記」が墨書されており、書誌的にも貴重な『三国史記』です。私は解題の下仕事をいたしました。先生に提出したレポートでしたが、先生が全面的に改められ、解題を完成されています。こういう思い出があります。それから、もうひとつの話題は、私が史学科の助手になる前、所長となる前の飯坂良明先生の訪韓が続いていた縁だと思いますが、大邱の啓明大学校に一年の間、博士課程の留学生兼講師として日本語科の学生に日本語会話と日本歴史を教えることになりましたが、そのときに使う教科書を持ってきて欲しいとの依頼が向こうからありました。児玉幸多先生のご配慮で、先生執筆の日本書籍版の「日本歴史」を持って行きなさいと、新大塚の日本書籍本社まで受

け取りに参りました。赴任まで時間がなく、二七冊を背負って参りましたので、日本語科の李賢起先生は「まあ、勤勉。日本人だわねえ」などと驚かれ、以後よくして頂きました。その出版社は、新しい教科書の件で倒産してしまったのが残念ですが、韓国の大学生に日本史を講義することは大変よい経験となりました。

数年前、文学部の玄関ホールに掲示板を見ていましたら、文学部の日語日文科の博士課程を修めた方が韓国各地の大学で日本語講師として活躍しているという、その大学名と所在地の地図が表示されておりました。記憶では一〇名前後の方が日本語の講師として勤めていることを知りました。日韓関係は教育の分野でも大きく変わったものと実感いたします。学習院のお嬢さんが韓国で日本語や日本文学の先生を勤める、また韓国で暮らすということは、関東圏で暮らすことと大きな不自由を感じない。それ程に韓国社会が豊かになったということです。学習院の日語日文科を修了された方であれば、韓国で日本語を教えることに相応しく、韓国側では安心して受け入れているものと思います。

今では何人ほどの学習院の卒業生が韓国の大学で、教壇に立たれているかわかりませんが、これからも大いに進めていただきたいものです。そういう方々がやがて日本に戻って、韓国の教壇に立っていた、韓国で生活した、その経験が活用されることを希望いたします。

〔東文研への期待〕

最後に東文研への期待ということですが、私も大学院大学の九州大学で大学院生をいかに育てるかということ、しかし、学位を取得しながらも、なかなか研究・教育職に就けないという大学院修了者が増えて参ります。頭の痛い問題です。

地方では人文系の教育と研究の衰弱化のことがあります。岡山以西の大学は数多くあるのですが、受験雑誌で指折り数えて調べたのですが、文学部をもつ大学の数はわずかです。地方の公立・私立大学などでは文学部は経営的に成立しない。国際文化などに改編して広く浅く学ぶ学部があります。また、社会福祉や医療関係の学部は社会の需要として当然とは言え、人文系の教育、研究が大変に衰弱しているのではないのでしょうか。

九州地区では西洋史学の先生は何人いるだろうと、八つの県がありますけど、きわめて少ないです。高校教育では世界史を担当する先生も少なくなっている。仏文学の先生が悩んでいました。九州でフランス語文学の先生は極めて少ない。九大を訪ねて、フランス語文学の対話が出来て、ホットしましたと。フランス語の受講生も年々少なくなっている。そういう人文学の状況の中で、東洋学はどう対応するかという問題があらうかと思えます。

それに加えて、近年、高まっている朝鮮、中国への新たな関心にどう応えることができるのか。私が育った七〇年

代、八〇年代は、日韓の経済に大きな格差があり、韓国では日本人に学び、日本に追いつき追い越せという熱が国民の等しい課題でした。日本を工業化の先輩として大事にするという時代でありましたが、今日、両国はさまざまな面で対等な関係になってきております。いろいろな問題があるが、韓国、日本で、また中国で台頭しつつあるナショナリズムに対してどう東洋学、アジア学はその克服のために貢献できるのかという問題があるかと思っています。

そういう中で、『学習院大学五十年史』、あるいは、『安倍能成―戦後の自叙伝』（日本図書センター、二〇〇三年）を拝読いたしますと、やはり大学の設立趣意書と東文研の目論見書などで、東文研設立について、安倍能成先生の構想が語られています。近くより遠くに及んで東洋に学び、東西文化の融合を図る、という崇高な文化の方向性が語られております。これは戦後の日本文化の再出発の原点に立って、今後の五〇年、百年の社会をどう建設していくのか、という希望の目論みであると思っています。

私にも東文研の、あるいは、学習院と大学の広報誌が送られてきますので読んでおりますが、学習院には学術的資産が多くある、あるいは、今後いろいろな貴重な資料が寄贈されるだろうと思います。特色のある研究所としてますます発展して頂きたいと思います。

それから、東洋文化講座が八〇回という記念の今日の会でもありますが、第一回は、田村さんと私が助手のころ、

斎藤先生の所長時代に始まったかと思っています。北一号館の階段教室で開きましたが、決して多くの参加はなかったのですが、研究成果を広く公開するということは大切なことであり、東洋文化研究所のサポーター、ファンをつくるということで、大きな社会的意義があることだと思っています。また東洋文化を理解する若手の人材育成。これは東文研だけじゃないようですが、学習院の広報のなかに、キャンパスアジアというプログラムを進めて、一〇数人の学生を中国、韓国に派遣し、また向こうから招いていることが紹介されていきました。これは他大学でも行っているようですが、大いに進めていただきたいと思っています。

三〇分の持ち時間が参りましたので、東文研を離れてもう二五年が過ぎますが、「東洋文化研究所と私」と言うたいそうな題目でしたが、いろいろと昔を振り返りながら、拙い思い出話をいたしました。ご静聴ありがとうございます。

（私は昭和四十九年四月から昭和六三年三月までの一四年の間、大学院人文科学研究所の院生として、また文学部史学科と東文研に助手として勤務した間の諸先生方との交流の思い出を当日の会で語りました。録音テープを文章とするに当たって、事実を確認いたしました。記憶違いや誤解もあらうかと思われまします。ご指摘を頂ければと思います）

（了）